送り屋さん。永遠の恋文

真一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
送り屋さん。永遠の恋文

【Ｎコード】
Ｎ００７０Ｇ

【作者名】
真一

【あらすじ】
ある商店街にある奇妙な店、その名は「送り屋」その店は未練に縛られた魂を解放して、あの世に送る店だった…そして今日も悩める依頼人が…

（前書き）

これはオンライン小説ＳＮＳ－ＳＴＯＲＩＡに投稿した作品で、送り屋さん。シリーズの「永遠に続くラブレター」を修正したものです。さらなる意見が聞きたくてここに投稿しました。厳しい評価お願いします。

賑わう商店街、夕方になり夕食の材料を買いにくる人々で溢れていた。

野菜が沢山並べられている八百屋さん、おいしそうなお肉が売られているお肉屋さん、色々な魚が売られている魚屋さん、そしていろいろな文具が売られている文房具屋さん、おばさんたちの好きな服屋さん、この商店街は色々なお店がある。

どこのお店も、沢山のお客で賑わっていた。

しかし、一つだけ人が寄り付かないお店があった。

そこは、木造の家のような形で他のお店の形とは違い、食材や物すら売っていない。

そしてその店の看板には、「送り屋」と書かれている……

「これが…、その手紙です…」

僕はゆっくり、上武に手紙を渡した。

「……」上武は何も言わず、手紙に目を走らせる。

「これで何通目…？」と上武。

「わかりません…、でも家の物置は手紙でいっぱいで、とても数えられる数ではありません…」

「ご家族は…？」

「母と父、それに姉ちゃんに、ばあちゃんが…」

「この手紙に心当たりは…？」

「いえ…、家族全員知らないと…」

「そうですか…」そう言って上武はゆっくりと息を吐いた。

この送り屋という店は、未練があってあの世にいけない魂を未練から解放して、あの世に送るという胡散臭い店だ。そして僕と話しているのは、送り屋の店主の　上武（じょうぶ）　辻眞（つじま）だ。

「…もしかしたら、お姉さんのストーカーとか…？」と上武は眉を潜めた。

「違います！ストーカーだったら、住所とか書くわけありません！」

「…住所？あぁ、これか…」と上武は手紙を見た。

「〇〇町◇◇、赤基山…、ここには一回行った事は…？」

「えぇ…、でもそこは…」

「そこは？」

「…墓地でした」

「墓地…？」

「はい、警察にも手紙を見せましたが『どうせウソの住所を書いたのだろう』って言われて…」

「……、わかりました…。これは警察では、対処できる問題ではありません…、我々「送り屋」の仕事です」

上武は頭を掻きながら言う。

なぜ僕が、この胡散臭い送り屋に訪れたかというと、それは、数十年以上続く手紙を断ち切るためだ。

今から十年前……

「お母さん！またこの手紙が入っていたよ！」

僕の姉さんが幼い時、その手紙を高々と母さんに見せた。その手紙は、よく時代劇などで出てくる長い紙に文字が書いてある。

そしてその手紙は、僕が生まれる前からずっと届いていたらしい。

「またその手紙か…、俺の生まれる前からもきていたらしいぞ」若き日の父さん。

「えっと何々…『あなたは鳥、自由な空を飛べる羽を持つ。あなた

は風、どこまでも行ける。あなたは魚、澄んだ水を気持ちよく泳ぐ。あなたは木、張るには鮮やかな花を咲かす。あなたは人、私の愛する、最愛の人…。この愛は、儚きモノ…。しかし、私はあなたを愛する…。この思い届いたならば、あのこの世で一番美しい所で会いましょう…』、…何これ…？」母さんの顔は、険しくなった。

「ちょっと！あんた私に隠れてコソコソ…！」母さんは父さんを睨み付けた。

「バカ…！違う！」と父さんは強く言い返す。

そして、幼い僕たちの前で言い争いになった。

「ちょっと！止めなさい！」どこからともなくおばあちゃんがやってきた。

「これは、英明に送られたものじゃないわよ…」とおばあちゃんは母さんを見た。

「でも…」と母さん。

「いい、この手紙は昔からこの家にずっと送られている手紙なの…、いたずらだから、こっちによこしなさい」

「はい…」母さんは言われた通り、おばあさんに手紙を渡した。

「あと、英明！浮気はダメよ！すぐにわかるから！」

「だから浮気はしてないって！」父さんは強く言い返した。

このような感じで、いつもその手紙はおばあちゃんに回収されていく。

そして十年の時が経ち、姉ちゃんは高校生になり、僕は中学生になった。

珍しく部活が無かったため、僕は早く家に帰りのこと、そのときみんなは、別々の用事があって家を空けていた。

久々の自由、僕はテレビを見ながら、リビングでくつろいでいた。

すると、あることを思い出しす。

「いい、良治…、決して…物置には行ってはダメよ…」

昔から、ばあちゃんは僕たち子供おろか、母さん父さんまでこのようなことを言った。

そのとき僕は、「まぁ、誰も居ないから…」そう思って一人物置に向かった。

そして、今まさに物置のドアを開けようとしていた。

「一体、中に何があるんだろう…」そしてドアを開けた。

「えっ…！」僕は息を呑んだ。

そこにあったのは大量あの手紙の山、紙の黄ばみ具合からするとかなり年代が経っている。

そして、その手紙はちゃんと年代ごとにまとめられている。その一つ一つを確認していくと、気が遠くなった。

これはおかしい…。

この手紙は七十年間ずっと届いたことになる。つまりこの人は、ずっと手紙を書いたことになる…、そして今日も…。

気味が悪くなった僕は内緒で警察に連絡した。

そして、送り先が墓地だとわかり、いたずらとして処理された。

無理も無い、七十年間手紙を送りつけている人など居ないからだ。

そしてそのことが、ばあちゃんに知られて、大目玉を食らった。

「でも…、なんで、物置を見ただけであんなに怒るんだ…？」と僕は思った。

その疑問を解決するため、僕はここに来たのだ。

「何故おばあさんがそんなに…？」上武が首を傾げて言った。

「わかりません…」

「ここにきたことは誰かに…？」

「はい、お父さんには…」

「そうか…、で、お父さんは？」

「『俺も気になっていたから、いいぞ』って…」

「そうか…、分かった…。後日調査する…」

そして僕は、送り屋を出た。でもこのとき僕は知らなかった。これから分かる悲しい真実を…

それからしばらくして、上武から連絡があり、一緒に調査することになった。

「すまん、人手が足りなくて…」と上武、

「いえ、大丈夫です、僕も何かお力になりたいと思っていましたから…」

そうして、上武は僕の家にやって来た。

「ここです…」僕は物置の扉を開けた。

「……、予想以上だな…」と上武は苦笑いした。

そして上武はそのひとつひとつを手に取って、

「きみも手伝ってくれ、住所がどこかの手紙で変わったはずだ…」

僕は言われた通り、住所が変わっている手紙を探した。

そして…

「あっ！これです…！」僕はその手紙を上武に渡した。

「……、成る程…」と上武は手紙を見た。

「今日はこれぐらいだ、明日俺はある場所に向かう…」そう言って上武は家を出て行った。

次の日上武は、ある場所に居た。そこはマンションが建っている。

「やっぱり、もう無いのか…」

すると、その横でほうきを持ったおばさんが掃除を始めた。

「あの、すいません…、昔ここで…」

そして三日後、上武から連絡があった。

「手紙の送り主が分かった。やはりこの世のモノじゃない…、あとおばあさんも呼んでくれ…」

そして、言われた通りおばあさんを連れて、僕は送り屋に向かった。

「何なのここは…？」とばあちゃん、

「いいから入って…！」と僕は強引に店の中に入った。

「あぁ、きてくれましたか…」と上武、

「何なの…！」とばあちゃん。

「分かったんです…」

「何が…？」とばあちゃんが言った。

「貴方達の家に手紙を送り続けている者の正体が…」それを聞いてばあちゃんの顔が険しくなった。

「何でそんなこと…！良治…まさか！」ばあちゃんは僕を睨んだ。

「お孫さんを攻めないでください…、そして絹子さん…、いつまで彼をこの世に縛り付けているつもりですか…？」

「何を言っているの…？私は…」

「この手紙を見てください」と上武は手紙を出した。

「これの次の手紙から、送り先が変わりました。墓地へとね…」

「……」ばあちゃんは何も言わなくなった。

「この住所に行くと、もうすでにそこはマンションになっていた、しかし当時を知るお年寄りから聞きました、そこに住んでいたある詩人のことを…」

「……私が全て悪いのよ」ばあちゃんが口を開いた。

「昔、私には5歳上の姉が居ました…。私が十五の頃、姉はある詩人に恋をし…、相手の詩人も同じ気持ちを抱いていました…。」

「ばあちゃん…」

「でも…、私もその詩人に恋をしていました…。姉が嫁に行くことになり、そのことが詩人の方にも伝わり、駆け落ちをすることを手紙に書いて、姉のもとに送りました…。でも…姉が読む前に私は姉の手紙を隠しました…」

「何でばあちゃんが、そんなことを…」

「いつも…、姉にいいものばかり取られていてね…、私も詩人の先生と一緒になりたくて…」とばあちゃんは涙を浮かべた。

「そして、来る日も来る日も手紙は届き、その度に私は破りすて、燃やし…、姉が読む前に処分しました…。そして、手紙には『私と一緒になりたいなら返事を書いて、たとえ無理なら、同じく返事を書いて送ってくれ』と書かれており、詩人の先生は返事を待っていたかもしれません…、そして姉が嫁に行っても手紙は続き、そして…」

「その詩人は、当時不治の病結核におかされなくなった…、」

「そうです…、でも…あの人が死んでからも手紙が…」

「しかも、墓場の住所で…」と上武は目を細めた。

「…私の姉は、嫁入り先で姑にいじめられて首を吊りました…、あの時、素直に手紙を渡していたら…、詩人の先生おろか姉まで不幸な死に方をしなかったかもしれない…そんな思いで今日まで生きてきました…」そして、ばあちゃんは泣き崩れた。

「そうですか…、これで詩人を縛る未練が見つかりました…。それは『手紙の返事を見たい』という一つの未練…、あなたは彼を何十年も縛り付けていたのです…」と上武は目を閉じ言った。

「じゃあ…どうすれば…？」と僕は上武に聞いた。

「返事を書けばいいのです」と上武。

「返事…？」

「はい、この手紙の返事を書けばいいのです、書いた手紙は彼の墓に届けます」

「さぁ絹子さん…、あなたがやってきたことを書いてください…、お姉さんに手紙を渡さなかったこと、お姉さんが死んだことを…」

「でも…、そんなことで…」とばあちゃんが泣きながら言った。

「彼は、手紙の返事だけを待っています。返事を見て、お姉さんが天国にいると分かればすぐに行くはずです…」と上武は言った。

「…分かりました」

そう言ってばあちゃんは、数十年続いたラブレターに返事を書いた。もちろん、自分のしたこと全部を書いて…。

その後手紙を上武に渡し、僕たちは送り屋を後にした。

それ以来、二度とラブレターが来ることは無い。

そして、その数ヵ月後ばあちゃんは、まるで隠しとうしていた罪から開放されたようにこの世を去った。

「ばあちゃんは成仏したのですか…？」

僕は再び送り屋を訪れ、上武に言った。

「あぁ、君の話を聞く限り、おばあさんは成仏したよ…」そういって上武は深々とソファーに座った。

「あの…」

「どうした？」

「その詩人の人は怒っていたんですか…？」

「いや…、やっと本当の返事が来て、満足していたよ…」と上武は笑いながら言った。

そうして、ゆくっりと商店街の午後は過ぎていった。

（後書き）

送り屋さん。シリーズは今まで書いた中での最高傑作だと思っていますが、どうだったでしょうか？
面白かったと思っていただければ光栄です！
さらに他の話も読んで見たいと思ってくれればさらに嬉しいです。
最後まで読んでいただき誠にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0070g/

送り屋さん。永遠の恋文

2010年10月11日00時03分発行